

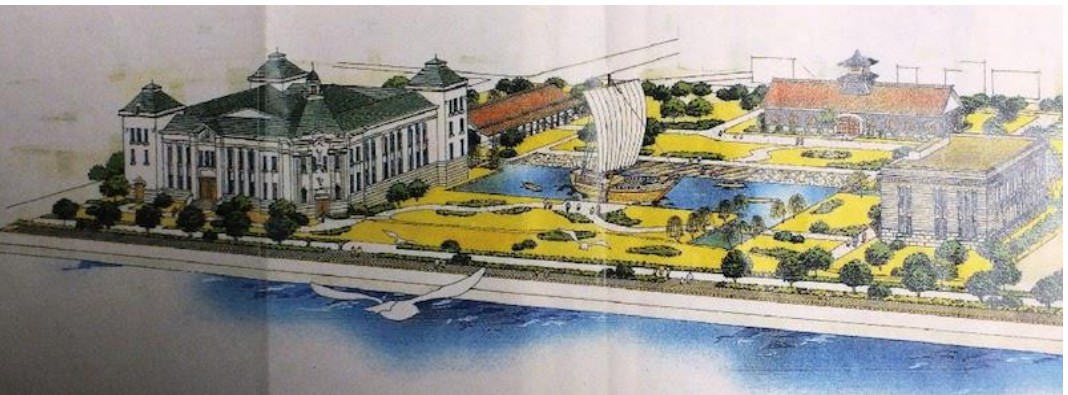
水の都新潟

新潟は美しい町である。人口は9万。開国してから二年、町には裁判所や立派な学校、病院、兵営などが、次々に建設されていた。小学校や中学校に加え、大学や英語学校まであった。英語学校には英米人の教師がいて、150人の学生がABCを学んでいた。県庁や銀行など西洋風の立派な建物もできており、その全てがバードが泊めてもらったファイソン夫妻の家から近かった。

日本で最も大きな信濃川が流れ込んでいる。江戸幕府の鎖国から、維新政府の開港へ。外国船が来れるように深い港を作ろうとしていたが、信濃川が毎年上流から運んで来る土砂は半端ではなく、苦戦していた。この2年間、外国船は姿を現さず、外国人は50人しか住んでいなかった。

道という道は、よく掃き清められ、ゴミや棒切れ、紙一枚でも落ちればすぐに拾い上げられ、あつという間にきれいにされてしまう。バードは「泥靴で歩くのは気がひける。イギリスにもこんな道があったら」と思ってしまうのだった。

信濃川をうまく利用して、たくさん運河が作られ、きれいな道と交わっている。ほとんどの家にはこの運河から荷物を運び入れることができるようになっており、馬は一頭も見ることは無かった。したがって、道路が馬糞で汚されてしまうこともない。





朝の水路は、野菜を乗せた小舟がどんどん入って来て、大混雑する。バードにはうずたかく舟に積みまきゆうりがなぜか気になるのだった。

この町が気に入ったバードは、一週間も滞在することになった。

日本人ほど、子どもを大事にする人々をバードはみたことがなかった。子供を抱っこし、背負ったり、歩くときは手を結び、子供が遊ぶのを飽きもせずに見たり、時には一緒になって遊んだりしている。いつも新しいおもちゃをくれ

てやり、遠足や祭りに連れていく。子供たちがいないと実につまらなそうに見える。

面白いのは、朝の6時ごろ男たちが14、5人集まって、子供自慢をすることだ。みんな腕には2歳にもならない子供を抱えていて、一緒に遊びながら自分の子供は体格がいいとか、賢いとか自慢話をする。かといって、人の子も自分の子わけへだてなく可愛がることだ。バードは何時間見ても飽きなかった。イギリスではこんな親子の姿は見る事ができなかった。大人が住む世界と子供の住む世界はきちんと分けられていて、日本人ほどベッタリとした関係になることはない。

日本人は外国の子供もかわいがるのだろうか？外国に開港して間もない新潟には、たった一人の外国の子供がいた。ファイソン夫妻の娘、ルースちゃん3歳だ。ルースちゃんがファイソン夫妻と一緒に街を歩くと、あつという間に人だかりができた。肩まで伸びた金髪と真っ白な肌のルースちゃんをみると口々に驚きの声があがった。



「ほんにめんごいなあ」

「外国人は鬼と言われてきたけど、子供はかわいい」

「着物でない、西洋の服だなあれは」

時分がかわいがられていると知ったルースちゃん。ここぞとばかりに愛嬌をふりまく。

時々、バードが目を離しているすきに、ルースちゃん自分の親から離れ、日本人の一团と一緒にになり、なにやら日本語を話している。

「こんにちわ。わたしの名前はルーツです」

群衆から、どよめきが起こる。

「外人の子なのに、日本語しゃべってるよ」

「ほんに大したたまげだ」

今の時代だったら、ちょっとしたスターといったところだろうか。